

多くの通勤通学者・および買物客を送り出している。栃木市の近隣町村（大平・都賀・西方・藤岡・岩舟）は現在もなお生活のうえで栃木市に依存するところ大であるが、今後栃木市がこれら近隣地域の中心核としてより充実した力をつけていくためには、近隣町村および宇都宮・小山までも含めた広域点な視点から都市のあり方を考えていく必要があると思われる。

## 隅田川流域の土地利用とその変遷

大 関 百合子

調査地域はいわゆる東京低地といわれる所で、西の端は山手台地の崖、東を荒川放水路とし、岩淵水門より下流の隅田川流域を対象とした。この地域は東京の中でも、大田・品川の城南地区と並び称される工業地帯である。

この論文は、歴史的な土地利用の変遷を見て行くことを目的とし、江戸に幕府が開かれた17世紀頃から、隅田川とのかかわりをも含めて、土地利用がどのように変わってきたかを大きく5段階に時代区分し、その時代背景などを見た。

江戸時代は、日本橋・神田を中心に、年代を経るに従って、市街化地域が拡大し、農地は市街地の周辺へと移り、山手台地上は主に武家屋敷・下町は商業地域として商人・職人などの居住地に利用されていた。

隅田川の洪水による下町の被害は大きく、徳川幕府は江戸市街の拡大に伴って、埋立や河川の改修が必要となった。そして、この頃から、江戸の町への物資運搬の交通路として、隅田川は重要になってくる。また、遠方から運ばれてきた物資をもとに、それらの加工業がおこり、だんだん河川沿いは工業的土地利用が行なわれるようになる。

こうして明治時代になって、西洋から近代工業技術が入ってくると、物資運搬の便のよい、また工業用水となる地下水の豊富な隅田川沿いや運河沿いに、官営工場や大工場がたてられ、その周辺には関連産業の中小工場が集まり、隅田川沿いは大工場地帯となった。

その後、日清・日露戦争・満州事変・第2次大戦などの軍需物資の需要激増によって、この地域の工業化は更に強化され、関東大震災や戦災による壊滅状態からもいち早くたち直り、ますます工業地域を拡大していった。

だが、地盤沈下の激化・公害問題などにより、今や大工場は大消費地である東京に立地するより、広大な敷地が得られ、工業用水の得やすい地域、または原料立地の方が有利になる傾向さえ見えてきている。

東京の中でも工業的土地利用度の高いこの地域は、無計画な土地利用であったので、大工場の跡地が住宅地として変わりつつある現在、移転したくとも移転資金のない零細・中小工場はとり残され、住工混在の中でますます不利な状態になってきている。

この地域は零細工場に特徴があり、零細工場に重点をおいた政策がとられるべきであろう。